はじめに——日本から見たイギリスのチャリティ

「イギリス」が喚起するさまざまなイメージ

困っている人に対して何かしたい。困っている時に何かをしてもらえたら嬉しい。自分の事ではなくとも困っている人が助けられている光景には心が和む——。この三つの気持ちに何ら思い当たる節のない人もいるのかもしれないが、まずほとんどの人は、いろいろ留保をつけるとしても、大筋では同意してくれるのではないだろうか。本書は、この三つの気持ちを軸にして描くイギリス近現代史の試みである。

ただ、その「気持ち」の中身とあらわれ方はいずれも、必ずしも私たちのそれと同じではない。次の一覧を読んでどう感じるだろう。自然に共感できるだろうか、異様に思うだろうか。

キリストの福音を知らない哀れなスラム住民にキリスト教を布教する組織、孤児を船乗りに訓練し「マンパワー」に仕立てる養育院、娼婦を「更生」させる収容施設、物乞い「撲滅」を目指す施し団体、アフリカの住民を「文明化」する協会、表沙汰にできず捨て子にされた赤ん坊を養育する施設、余った貧しい大人や子どもを海外に移民させる組織、あるいは、孤児や老

人を皆で「選挙」して当選者だけを救済する方式、救済資金を得るために宝くじを売るやり方、など。これらはすべてイギリス近現代史に登場する。そのことが持つ意味は何だろうか。

ところで、イギリスと聞いて何を浮かべるだろう。一七世紀半ば以降の主要な戦争にほぼすべて勝利し、一九世紀には世界の最先端・最強・最富裕国であり、今もG7の一角を占め、国連常任理事国で、核兵器を保有する軍事大国であるわけだから、自分の生きている世界についてものを考えるほどの人であれば、何かを連想できないはずはない。二一世紀初頭の大問題としてはもちろん、ブレグジットをめぐる迷走とEUとの難しい関係が想起されるだろう。二〇二〇年一月の正式離脱直前まで続いたこのドタバタのせいですっかり株を下げてしまった感のある、少なくとも一七世紀末——日本で言えば元禄時代——にまでさかのぼることのできる不文憲法と二大政党制に基づく成熟した議会主権の伝統をイメージする人もまだ多いだろう。

また、シェイクスピアやディケンズ、コナン・ドイルやJ・R・R・トールキン、ジョージ・オーウェルやC・S・ルイス、J・K・ローリングなど、その作品群が読み継がれるだけでなく、世界中のクリエイターたちにインスピレーションを与え、無限に翻案され続けている英文学。そして、英文学をつづる言語であり、イギリスの俳優や歌手や政治家や知識人に、アメリカ人とは違う、いわく言い難いオーラを付与している英語。

話している英語の種類でその人のお里が知れると言われるほどの、根強い階級社会。その階

級社会のエリート層を産み出すパブリックスクールや、オックスフォード、ケンブリッジといった大学。他方で労働者階級独自の文化。この国が発祥の地であるサッカーやラグビー、ゴルフやボクシング、バドミントンやテニス、なじみはないが世界的に人気のクリケットなどのスポーツ。かたや先端を行くポピュラー音楽やファッションの都市的文化と、かたや時が止まったかのようななだらかな田園風景や牧歌的な村、スコットランド高地の荒涼たる風景、美しい庭園。医療費基本無料、「ゆりかごから墓場まで」の福祉国家。

イギリスの伝説や歴史に関心のある人にとっては、アーサー王やロビン・フッド、ヘンリ八世やエリザベス女王（一六世紀の一世も現代の二世も）、ウィンストン・チャーチルのようなドラマチックな人物や、世界最初の産業革命と未曽有の経済成長、強力な金融街シティ、最強の海軍と商船団によって七つの海を支配した空前の「大」英帝国など、世界史的な事項を思い浮かべるだろう。とくに、イギリスが一七世紀頃から形成した帝国の痕跡は、英連邦（コモンウェルス）をはじめ、今の世界に深く刻まれているので、印象が強いのではないか。

アメリカ合衆国、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、香港、シンガポール、インド、南アフリカで英語が公用語（のひとつ）になっていること、ダージリンやアッサムなどイギリスの代表的な紅茶の銘柄にイギリス外の地名が付されていること、首都ロンドンには（東京に比べて）非常に多くのエスニック集団が居住していること、大英博物館には膨大な量の世界中

の貴重な文化遺産が収蔵されていること、イギリスの中東政策の惨憺たる結果としてのイスラエルとアラブのパレスチナ問題。

チャリティの不在と本書のねらい

右の簡単な列挙項目を組み合わせれば、それなりに実態を反映したイギリス像が立ち上がってくるのは確かである。しかも、どれも比較的よく知られているし、もし知らないという場合にも、参照できる有益な日本語の書籍やネット情報には事欠かない。ところが、これらに比べるとあまり知られていない特徴が、イギリスとその歴史にはある。慈善、すなわち国や地方自治体ではなく民間で、通常の経済活動とは異なり非営利的に行われる、さまざまな「弱者」を救済する活動が、きわめて活発で、自然なものとして社会に深く根付いているのである。

定評のあるオンライン版『オックスフォード国民伝記辞典』で検索すると、収録総数六万人あまりのうち、おおよそ一〇％の項目には「チャリティ」や「博愛（フィランスロピー）」という語が出てくる。属性として「慈善家（ベネファクター）」や「博愛主義者・慈善家（フィランスロピスト）」や「チャリティ活動家」と記載される人も七〇〇人ほど収録されている。

近現代イギリスにおける「フィランスロピー」の概念史を概観した二〇二〇年のある著作は、「フィランスロピーはしばしばナショナル・アイデンティティの表明にして具現であるとみな

された」、「イギリス人は自らを世界で最も博愛的な国民だと考えた」と記している。実際、一八一〇年にロンドンに拠点を置くチャリティ団体の便覧を編纂したアンドルー・ハイモアは、「チャリティは国民的美風」で、イギリス人が「ヨーロッパ諸国民のなかで一番」同情心にあついと述べた。一八六四年の『タイムズ』紙の社説は、イギリス人が「いつも《寄付をしている》」ことを指して、「それは私たち国民と人種の特徴のひとつ」だと書いた。

フランスやオランダの観察者も、イギリスでのチャリティの活況にたびたび驚きを示した。日本社会事業の父と称せられる生江孝之も『欧米視察――細民と救済』(一九一二年)の中で、「公費救助額の多きのみならず、私営救済事業亦旺盛にして、其の種類の多きは勿論、之れに要する経費も頗(すこぶ)る多額に上り、倫敦(ロンドン)に於ける救済事業の如き、其の数三千、之れに要する経費、少なくも一億萬円に達して居る」と驚嘆している。

日本語では慈善や博愛と訳されることの多いこの行為を、本書では「チャリティ」というカタカナ語で表記する。チャリティは、冒頭に挙げた三つの気持ちの結節点である。私は誰かを助けたい、私は誰かに助けてもらえたら嬉しい、誰かが誰かに救われる社会は善い――。チャリティとその根底にひそむ三つの気持ちは、右のイギリス的な諸要素とも密接に関わっている。むしろ、チャリティの歴史を加味せずにイギリスを理解することは、たとえば議会や帝国の過去を無視してイギリスを理解しようとするのと同じくらい、無謀なことである。

明治時代以来、日本にとってイギリスは手本として学ぶべき「近代」や「文明」や「大国」の表象であり続けてきた。だからこそ、膨大な量の情報が集められ、多方面から検討され、より近代的で豊かで強い日本になってゆく上で必要な知識やノウハウが採用されてきた。私たちが今、イギリスについて右に挙げたようなさまざまなイメージを持っているのはそのためである。翻って、このイメージの中にチャリティが含まれていないとすれば、それは、チャリティが多くの日本人にとって関心をひく事象ではなかったからである。近代、文明、大国を実現するためのレシピには含まれると思われなかったのだ。

そこで本書は、チャリティという現象を軸にしてイギリス近現代史を描いてみることによって、新しいイギリス像を提供するとともに、日本に生きる私たちがチャリティ的なるものとの向き合い方を考え直すきっかけともしたい。その際、ただイギリス近現代史を見つめるのではなく、右の三つの気持ちが合流する現象を世界史的に捉え、そこに西洋のチャリティ的なるものの諸実践の流れを位置付けて、その中でイギリス近現代におけるチャリティを解説しよう。

断っておくと、イギリスはチャリティが盛んだからいい国だ、といった単純でナイーブな主張をしたいわけでも、その逆を張って、チャリティに頼るなど時代錯誤の偽善だと批判したいわけでもない。その独特さを観たいのだ。今のイギリスを過去に投影して首尾一貫性を論証したいのでもない。歴史的に捉える「イギリス」の輪郭はもっと起伏に富み、孔がある。

こうした態度で見据える先には、イギリスを独特と見てしまう私たちの独特さも視野に入ってくる。そのさらに先に、長い歴史を踏まえた反省に立って、目前の問題に対する処方箋を模索することができるだろう。

現代の日英チャリティ比較

長らく、日本人はイギリスのチャリティに関心を払ってこなかった。イギリスのチャリティが小規模ゆえに気付けなかったのではなく、逆に、少なくとも明治以降、日本におけるチャリティ的なるものの役割が小さかったために、これが重要な社会制度であると認識できなかったからである(同調圧力や権力によって促される滅私奉公や各種の「奉仕」と、近現代イギリスに観察されるチャリティは似て非なるものである)。

イギリスには一九一九年に設立されたボランティア組織全国協議会(NCVO)がある。そこが毎年『UK市民社会年鑑』を出しており、二〇一八年版には、二〇一五/一六年の連合王国(UK:イングランド&ウェールズ、スコットランド、北アイルランド)におけるチャリティ団体の収入内訳が詳述されている。ちなみに、この年鑑において「チャリティ団体」であるための要件は、組織性、独立性、非営利性、自治性、自発性、公益性である。

イングランド&ウェールズでは、一八五三年から国の常設機関として続いているチャリティ

委員会、スコットランドではボランティア組織スコットランド評議会（ＳＣＶＯ）、北アイルランドではボランティア活動北アイルランド評議会（ＮＩＣＶＡ）が情報を持っており、それらに基づくとＵＫ全体で一六万六〇〇一のチャリティ団体がある。日本のＮＰＯ団体は五万強である。さて、この一六万団体に対して、当該年度に個人からの寄付収入は一一八億ポンド、チャリティの一環としてなされる財やサービスの提供、資金集めのための物販やサービスの提供で得られる収益を加えると二二二億ポンドになる。一ポンド＝一五〇円で計算すると、前者は一兆七七〇〇億円、後者は三兆三三〇〇億円である。

これとは別に私企業からの寄付は一〇億ポンド（一五〇〇億円）、政府やＥＵ、国際機関や財団からの助成金収入が約七〇億ポンド（一兆五〇〇億円）あった。すべての寄付と収益を合計すると、四七八億ポンド弱に達し、そのうち四〇〇億ポンド近く（約六兆円）がチャリティ目的で支出されている。

一方、日本ファンドレイジング協会が発行している『寄付白書二〇一七』によれば、日本における二〇一六年の個人寄付は七七五六億円で、二〇一五年の法人寄付は七九〇九億円であった。個人寄付だけを比べると、名目ＧＤＰ比でイギリスは四倍である。この日本の数値は、「ボランティア元年」を画した一九九五年の阪神淡路大震災、そして二〇一一年の東日本大震災を経てボランティアへの理解が格段に増した後のものであることに注意しなければならない。

なお、UK人口は二〇一九年現在で六七〇〇万人程度だが、日本は一億二六〇〇万人、二〇一七年の名目GDPはUKが二兆六五〇〇億ドルに対し、日本は四兆八七〇〇億ドルである。

もう一つ例を挙げよう。笑いで援助をという国内外の弱者救済を進めるチャリティ団体が二年に一度三月に行うテレビ募金イベント、「〔ピエロがつける〕赤鼻の日」は、ちょうど日本テレビの二十四時間テレビに相当するものといってよい。二〇一七年の二十四時間テレビでは七億円の寄付があったのに対して、同年の「赤鼻の日」に集まった寄付額は七六〇〇万ポンド（一一四億円）であった。

こうした日英の差はここ数年の現象ではない。イギリスでは一八世紀頃から一貫してチャリティが盛んだという自己認識を持ってきた。日英で顕著なコントラストをなしているとみてよい。だからこそ、時事評論的に「今」で比較するだけでなく、歴史に尋ねなければならない。

チャリティ団体のブランド力

とはいえ、金額や数で比較するだけではイメージが摑みにくいだろう。そこで、次のように問うてみたい。日本のボランティア団体を五つ挙げられますか、と。歴史ある団体や熱心な活動はそこここに見られるにもかかわらず、これに答えられる人はとても少ないと思う。しかし、イギリスには、全国的に著名な団体がいくらも存在する。

イギリスの経営コンサルタント会社サヴァンタが二〇一九年に、『二〇一八年版　価値あるチャリティ・ブランド百選』をオンラインで発表した。さまざまな指標を駆使して、知名度や資金力を兼ね備えた団体をランキングしている。いくつかピックアップしてみると、一位にがん研究ＵＫ（二〇〇二年）、二位にイギリス心臓財団（一九六一年）、三位に救世軍（一八六五年）、五位にライフボート協会（一八二四年）、七位にオックスファム（一九四二年）、九位に動物虐待防止協会（一八二四年）、一一位に子ども虐待防止協会（一八八九年）、一二位にナショナル・トラスト（一八九五年）、一三位にセーブ・ザ・チルドレン（一九一九年）である。これらの団体のロゴやコマーシャルやチャリティ・ショップ、募金活動や実践を知らない人はいない。

二〇一五／一六年におけるイングランド＆ウェールズの十大チャリティでみると、がん研究ＵＫは第二位で六億三一〇〇万ポンド（九四六億円）の収入があった。ナショナル・トラストは三位で五億二三〇〇万ポンド（七八四億円）、セーブ・ザ・チルドレンは六位で三億九三八〇万ポンド（五九〇億円）である。これらを頂点とし、数的には半数以上を占める年収一万ポンド（一五〇万円）以下の小規模組織を広く裾野に持つチャリティ界のピラミッドができている。

巨額の個人チャリティ

個人の巨額寄付もよく知られている。『サンデー・タイムズ』紙には毎年恒例の、イギリス

の資産家トップ千人を、資産、業種、経歴などとともに列挙する企画がある。その『長者番付（リッチリスト）二〇一九年』（二〇一九年五月十二日号付録）掲載の「寄付番付」（資産に対する寄付額の比率で算出）によると、第一位のジョナサン・ラッファー（投資会社経営）は、長者番付七八六位（歌手アデルの一つ上）で資産一億五一〇〇万ポンド。彼は過去一年の間に現有資産の二倍以上にあたる三億一七五〇万ポンドを、「コミュニティ、アート、社会、文化遺産」関連に寄付した。

一八六九年創業のスーパーマーケット・チェーンで知られるセインズベリー一族は、資産五億三四〇〇万ポンド（二五八位）で、この一年で寄付番付三位、一億六六八〇万ポンドを「教育、アート、人道」目的に寄付した。七八歳の現当主（二〇一九年現在）は、イギリス史上初めて一〇億ポンド以上をチャリティに寄付した人物とされる。

歌手のエルトン・ジョン（三九九位）は寄付番付の常連で、この一年で二七一〇万ポンドを「HIV／エイズ、医療、人道」関連に投じた（一二位）。『ハリー・ポッター』の作者J・K・ローリング（一九一位）もチャリティに熱心で、一年で三九〇〇万ポンドを「子ども、女性、ひとり親、海外」の支援に充てた（二〇位）。

言うまでもなく、ふつうの市民たちによる、膨大な数の少額の寄付やささやかなボランティア活動の裾野が広がっているのであって、超富裕層だけがチャリティをしているわけではない。

チャリティの帝国を描く

どうやら、イギリスは思っていた世界とずいぶん異なる様相を呈しているらしいことが見えてきた。ではなぜ、イギリスの人々は国内のみならず世界中の諸問題に対して自発的に取り組み、莫大な金と多くの労力と時間を捧げてきたのか。なぜイギリスはチャリティが当たり前の社会であるのか、そして、イギリスの近現代史にとってチャリティが当たり前であることにはどういう意味があったのか。本書では近現代イギリスを「チャリティの帝国」として描く。世界ににらみをきかせ、政治的、経済的、軍事的、文化的に圧倒的な影響を及ぼした「大」英帝国史には出てこない、もうひとつの帝国の歴史を振り返りながら考えてゆこう。

＊近現代における貨幣単位は以下のとおりである。

一ポンド＝二〇シリング＝二四〇ペンス（一九七一年まで）

一ポンド＝一〇〇ペンス（一九七一年以降）

目　次

はじめに——日本から見たイギリスのチャリティ

第一章　世界史における他者救済——イギリスの個性を問い直す……1

一　文明と他者救済　1

二　自己愛から貧者への愛へ　4

三　キリスト教と慈善　10

四　新興プロテスタント国に変容するイギリス
——貧困・チャリティ・公的救貧　28

第二章　近現代チャリティの構造——歴史的に考えるための見取り図……43

一　イギリス近現代史のなかの変数と定数　43

二　自助のイデオロギー、互助の共同体　46

三　チャリティ　54
四　公的な制度　66
五　福祉の複合体の働き　72

第三章　自由主義社会の明暗――長い一八世紀からヴィクトリア時代へ　……75
一　市民社会の台頭と、有用な弱者の救済　75
二　無用な弱者への処遇　95
三　エンターテイメントとしての救済　110

第四章　慈悲深き帝国――帝国主義と国際主義　……135
一　海外進出の時代――「慈悲深き」強国　135
二　帝国とチャリティ　148
三　どういう金でチャリティをするのか　166
四　国際人道支援の起源　176

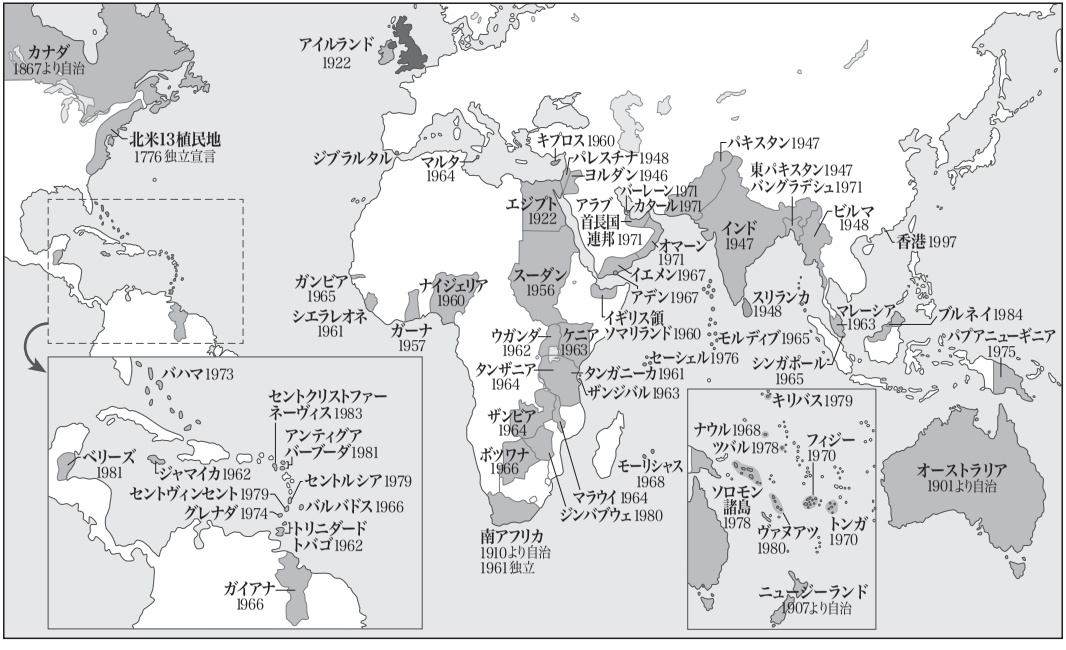
第五章　戦争と福祉のヤヌス――二〇世紀から現在へ　……195

一　戦争国家と福祉国家　195
二　総力戦とチャリティ――善意の動員と動員解除　198
三　福祉国家の時代のチャリティ　207
四　ポスト福祉国家へ　213

おわりに――グローバル化のなかのチャリティ　221

あとがき　229
図表出典一覧
参考文献
索引

ブリテン諸島地図
本書に登場する都市.



イギリス帝国の範囲と各地の独立時期

中国租界は反映させていない．また，南米アルゼンチンの南東沖に浮かぶ英領フォークランド諸島は，左下の拡大図の下にかくれている．

「10 ポンド」の価値の目安　1300–2000 年

年	馬（頭）	牛（頭）	羊毛（ストーン）	小麦（クウォーター）	熟練職人の賃金（日）	2017 年の貨幣価値（ポンド）
1300	11	22	43	38	1000	7090.3
1350	14	27	71	27	500	5872.37
1400	7	17	55	32	500	6127.74
1450	13	25	71	27	333	6244.05
1500	7	26	90	25	333	6659.57
1550	2	8	31	10	333	2746.99
1600	1	5	29	5	200	1378.77
1650	1	1	12	2	142	1035.17
1700	1	2	16	5	111	1069.83
1750	1	2	21	6	100	1166.69
1800	0	2	11	1	66	440.73
1850	0	1	15	4	50	801.86
1900	0	1	18	7	30	781.72
1950	0	0	2	1	7	312.09
2000	0	0	1	0	0	15.34

＊ストーン：14 重量ポンド（6.35 キログラム）
＊クウォーター：8 ブッシェル（290 リットル強）

第一章　世界史における他者救済——イギリスの個性を問い直す

一　文明と他者救済

チャリティ的なるものの歴史上のヴァリエーション——ポトラッチ、仏教

チャリティという言葉にはどうしても西洋のキリスト教的な価値観が含まれてしまうが、誰かを助けたい気持ち、助けてもらえたときに感じる喜びの念、救い救われる光景に心温まる思い、という三要素は、ヨーロッパに起源したわけでもそこが本場であったわけでもない。そこで、やや間口を広げるために、チャリティではなく「チャリティ的なるもの」を、現在の地点から振り返って、人が他人の窮状の緩和に手を差し伸べているように見える行為とその背後にある動機、という観点から、もっとも広い範囲に網をかけ、そこから順次、絞っていこう。

たとえば、北米ネイティヴ・アメリカンのクワーキウーツル族の儀礼ポトラッチ。宴席で首長は、招いた客人たちに盛大な贈物をし、さらに、膨大な余剰を海に投じたり、火にくべたり

朽ちさせたりして敢えて蕩尽してみせた。客人は今度は宴の主催者となり同種の大盤振る舞いを再演し、この義務的贈答関係が名誉にかけて延々繰り返される。主催者は一族の始祖の生まれ変わりで、生命の与え手である強力な精霊に扮して、大量の物資を手放し人に与え、無に帰する(大地に返す)ことで、世界の「口」に食べさせて生命を再生させるのである。人間と自然を区別しない世界観の下で行われたチャリティ的なるものといってよいだろう。

自と他を区別しない世界観を擁する仏教の信仰圏でもチャリティ的なるものはある。大乗仏教は、すべては「空」で自己もなく所有もないとの認識の上に社会倫理を構築した。自分と他人の間に区別なしという認識から、他人のためにはたらくことが推奨される。小乗仏教でも重視される心的な状態は、この世の生あるものの安寧を願う「慈」と、この世の煩悩やしがらみからの「出離」である。それゆえ、大乗・小乗ともに、波羅蜜(悟りへの道)の第一は布施(ダーナ)になり、良い時に悔いなく進んで見返りを期待せずに与えるのをよしとした。

日本でも古来、仏教僧侶による飢饉時の施行(せぎょう)や各種の勧進行為は数多く記録されている。与え手も受け手も施与物も、すべては「ない」と捉えるところが仏教的で、以下で概観する一神教におけるチャリティ的なるものの見方と対照的である。

ユダヤ教、イスラーム

ユダヤ教、キリスト教、イスラームの信徒は、ネイティヴ・アメリカンと違って人間と自然を分けて把握し、仏教信徒とは異なり、自と他を区別する世界観の下に生きている。ユダヤ教は唯一絶対の神を信仰し、宗教的な義務として、神の「義」(正しさ)を表すために施しをする。これをツェダカー(「正義・義」の意)という。一二世紀末にマイモニデスによって定められた「慈善の八段階」によれば、最高の慈善は同胞を助けて自立を促すことで、次に与え手と受け手が互いに分からない状態での施し、その下に、誰が与え手か受け手に分からないような状態での施し、誰が受け手か与え手に分からない状態での施し、乞われる前に行う施し、乞われてから行う施し、親切な態度ではあるが必要に足りない程度の施しときて、最後に渋面を作ってなす施しが最低だとされた。

ここから浮かび上がるのは、ユダヤ人同胞に対して特に向けられる同情や寛容の重視、そして対症療法ではなく予防的になされる救貧の重視である。とりわけ中世以降のヨーロッパで生きたユダヤ人たちはキリスト教のホスト社会にマークされないよう、共同体内の弱者を自分たちの手で救済する必要があった。

同じく唯一神を信仰するイスラームでは、信者のなすべき「五行」として、信仰告白、礼拝、断食、巡礼と並んで「喜捨」が数えられており、隔絶した存在である神に少しでも近づくために、公共目的での自発的な施しが推奨された。聖典クルアーンによる「喜捨」には、義務的な

一種の税、人間の財産に対する神の権利としてのザカートと、自発的に差し出すサダカがあり、これらが貧者や困窮者、新たな改宗者、奴隷（身請けするため）、債務者（負債を肩代わりするため）、兵士や布教者、旅人に救いの手を差し伸べた。

他方で、クルアーンに規定のないワクフ（信託、財団）がある。これは「永続するサダカ」とも呼ばれ、その基金によって、モスク、橋、井戸、地下水路（カナート）、病院、薬局、図書館、天文台、救貧院、マドラサ、融資機関などが創設され、半永久的に維持運営されるものとされた。支配者の交替にも左右されず、地域のインフラとして大きな役割を果たしてきた。

キリスト教的チャリティも、大きなカテゴリーとしては一神教のそれに含まれるが、イギリスを構成要素のひとつとするヨーロッパにおいて、チャリティ的なるものはキリスト教だけによって構築されてきたわけではない。キリスト教化以前の伝統も踏まえて初めて、ヨーロッパあるいはイギリスの実践の個性を捉えられる。以下では、ヨーロッパに注目し、古代ギリシアの時代から幾層も積み重なったチャリティ的なるものの思想・実践を観察してみたい。

二　自己愛から貧者への愛へ

フィラントロピアと美徳

古代においては、「貧者に与える」ではなく「善き者に与える」ことが重要であった。どういう意味だろうか。古代ギリシア・ローマの人々はチャリティ的なるものを心の中に有していなかったのだろうか。答えはイエスでありノーである。

小さな都市国家（ポリス）の政治主体であった古代ギリシアの市民（成人男性）は、「フィラントロピア」という言葉を持っていた。現代英語でチャリティの類義語として用いられる「フィランスロピー（博愛）」の語源である。しかし、意味合いは異なっていた。紀元前四世紀アテナイの哲学者アリストテレスは、友愛を善き人生の基礎と捉え、フィラントロピアに同胞を愛する性格といった意味を付与して高く評価する。ポイントは「友愛」および「友人」（「善き者」）であった。やがてフィラントロピアは、関係を構築する手段としての贈物の提供、具体的にはポリスへの食糧供給や財団の創設、各種建造物の提供や困っている人への援助なども指すようになったが、この軸は変わらなかった。

つまり、フィラントロピアは同類の者、同じ市民間でしか成立しない。先に挙げたポリスへの食糧供給や財団創設は、たしかにポリス内の比較的貧しい者たちに益する行為であるが、恩恵を受けた市民たちが集団として、供給者に対して顕彰碑文を建立するなどして「名誉」を付与する点で市民間の関係が維持されるのだ（奴隷や非市民からの「名誉」は、「名誉」に値しない）。食糧を供給したり建造物を寄贈したりする人を公的善行者（エウエルゲテス）と呼ぶが、彼らはポリスからの「称

賛」を期待してこのようなことを行う。

名誉にせよ称賛にせよ、通常私たちが想像する助けてもらった人からの「感謝」とはニュアンスが違う。称賛目当てで何かを与えるなど、品性卑しい行為のように見えるかもしれないが、当時の価値観からすればそうではない。名誉心は、厭うべき虚栄心とは厳密に区別されていた。再びアリストテレスを引くならば、人格者とは、最も好ましい人生を生き、最も褒むべき行為を行うことで幸福を得る人である。最も褒むべき行為とは美しい行為であり、それは、気前よく友人に対してなされる親切な行い、もっといえば(市民たちの共同体である)公共のための恩恵である。ここには、利他的な人間愛や、友人に含まれない弱者や貧者への無償の憐みの入り込む余地はない。アリストテレスは明言している。「善い人は自愛者でなければならない」。

現代人には異様に見えるが、ポリスを構成する同じ市民たちからの称賛・名誉を目当てにして彼ら向けの「善行」に勤しむエゴイストが、この世界では美徳の持ち主、人格者だった。

エヴェルジェティスムの建前

このような古代世界独特の自己本位の、同じ市民へ向けた施し行為のことをエヴェルジェティスム(恵与志向——右記の「公的善行者(エウエルゲテス)」から派生)という。エヴェルジェティスムは、共和政期ローマにおける基本的な人間関係であった「保護者–被保護者」の間にも、建前として機能し

た。保護者による恩恵は、被保護者からの政治的支持という形で見返りを得るものと目され、そのような互酬性に下支えされていた。

さらに時代が下って帝政期には保護－被保護のピラミッドの頂点に皇帝が君臨するが、「パンと競技場」――ローマ民衆への食事と見世物の提供――に象徴されるように、皇帝は一方的に恩恵を施したのではなく、民衆による支持を見返りとして期待し、民衆は支持の見返りとして諸々の恩恵を受けた。また、ローマの元老院議員や帝国各地の有力市民たちは、競技会の開催や建造物の寄贈など、名誉と称賛を得られる都市への恩恵付与、公共的奉仕を続けた。それどころか、これらは半ば義務のように考えられたがゆえに、都市行政に組み込まれる部分もあり、有力市民たちが過重な負担にあえぐ例も生じた。

エヴェルジェティスムの射程に、貧者や奴隷は含まれない。飢えた人、老人、病人、虚弱な嬰児など、私たちならば、救済の対象だと真っ先に考えるような存在をあっさり見捨てるのが、生産性の低い世界でポリス間での過酷な生存闘争を繰り広げていた古代ギリシア、周辺領域を併呑して広大な版図を築きその維持に腐心していた古代ローマの価値観だったのだ。

キリスト教の台頭と「貧者」

右のような、成人男性を中心とする市民基盤の社会モデルは、ローマ帝政後期に危機に見舞

われる。安定的な支配は動揺を見せ始め、中央と地方の諸権力、諸勢力の興亡が、社会不安を生じさせた。これまで都市のインフラを提供し、実質的な救貧を担ってきた有力市民にも余力がなくなってくる。そのタイミングで勢力を伸ばしたのが、一世紀に誕生したキリスト教であった。

四世紀半ば以降、各地のキリスト教の司教が当局から諸特権を得ることと引き換えに、「貧者のケア」を引き受けるようになった。これまで長らく無視され、共同体の最富裕者によるエヴェルジェティスムによって間接的に受益してきた人々は、最富裕者たちの退場と入れ替わりにやってきたキリスト教会によって社会集団として把握され、新たに意味を付与された。貧者は、人格者のエゴイズムを満たすことのできない無価値な恥を伴う存在から、教会を介して集団として支配者に(ケアを求めて)請願する者へと、司法的含意を帯びるようになった。

さらに、キリスト教が強調していた「神の前では皆等しい(等しく貧しい)」という発想は、ケアの提供者(教会の主軸をなす中間層)に、貧者を我が身に置き換えてイメージする心的態度を促した。三世紀のカルタゴ司教キュプリアヌスは説教の中で、どうしてあなたは富に気を奪われているのか、なぜ結局罰になるというのに財産の重荷を地上に積み上げているのか、と問いかけている。そして、「この世で豊かになればなるほど、神の前では貧しい者となる」のだから、あなたの収入を「神と分け合い」、「キリストと共に分かち合い」なさいと説く。施与する

者とそれを受ける貧者とが、神の前において、同じ者とされたのである。

このようにして、施しの授受がなされる「同胞」のニュアンスが下方移動した。「エヴェルジェティスムのキリスト教化」である。チャリティ的なるものの提供者は、古典古代型の「都市を愛する者」から、キリスト教的な「貧者を愛する者」へと変容を遂げた。

古代世界におけるチャリティ的なるもの

変容が生じる以前のチャリティ的なるものの最大公約数的なあらわれを、本書のライトモチーフとなる三つの気持ちに沿って変奏しておこう。**㈠困っている人に対して何かしたい**――。ただし自分の美徳を発揮するために、友人・同胞市民・都市に対してそうしたい。**㈡困っている時に何かをしてもらえたら嬉しい**――。ただしその嬉しさは称賛と名誉付与によって表現する。**㈢自分の事ではなくとも困っている人が助けられている光景には心が和む**――。ただしそう感じるのは自分の属する都市の場合にほぼ限定される。

やがて、従来的なチャリティ的なるもののとは一八〇度発想の異なるものがでてきた。次に中世ヨーロッパにおけるその新しいチャリティ的なるものの特徴を概観していきたい。

三　キリスト教と慈善

一神教とチャリティ的なるものの要請

一世紀に誕生したキリスト教は、先行するユダヤ教と後続のイスラームと根を同じくする宗教である。いずれも一神教で聖典を重視し、他者に対して気前よくあるべきことを命じてもいる。ユダヤ教ではツェダカー、キリスト教ではチャリティ、イスラームではサダカとして表現される徳目である。キリスト教のチャリティは、前節で素描した、救済に関する自己本位的な価値観が浸透する世界にあっては、きわめて異質な思想であり実践であった。しかし、それが中世において支配的な地位を占めるに至った。

中世初期の新展開

ニュッサ司教グレゴリオスは、四世紀の混乱ぶりを鮮やかに描写している。「沢山の彷徨者が私どもそれぞれの門前にいる」。こうした「寄留者や移民」にとって、「家とは野外の空気、宿とは回廊であって、街路、広場の中の一層人気のない場所」であり、「衣服とは全面穴だらけのボロ切れ」であり、「その作物は憐れむ者たちの親切」である。「地面がベッド」、「川や池